

## 第31話 診察の意義を見直そう

星野達夫 慶友整形外科病院 内科

私の年齢のせい、ときどき患者さんから若い先生の診療内容に関する苦情をいただきます。調べてみるとたいていの場合、診療内容には問題がなく、十分な専門知識を身につけた優秀な医師であることが多いのです。ではどうして苦情がくるのでしょうか？ それは患者さんとの接し方にどうも問題があるからようです。せっかくよい診療をしているのに、ちょっとした行き違いからトラブルになってしまうのはもったいない。この連載では医師は患者さんとどのように接したらいいかを検討していきます。

ここ数回にわたりがん告知という重いテーマが続きましたので、今回は少し話題を変えて、「診察の意義」について考えてみましょう。

画像診断の目覚ましい進歩により、以前は想像もできなかったほど正確な診断がつけられる時代になりました。その一方で、丹念に病歴をとり丁寧に診察をして病気を診断するという臨床医の基本的な姿勢が、次第に失われていくように思われます。若い先生が「超音波やCT検査をすればわかるのだから腹部の触診などもう必要ない、あれはセレモニーに過ぎない」などと言うのを小耳にはさむと、「医療の現場も変わったものだ、でもこれでいいのだろうか」と思ってしまう。

そんなことを危惧している折に、勤務先の病院でMRIの腹部冠状断面画像を見る機会があり、その精緻さに驚きました。門脈や腸間膜動脈が解剖図譜そのものに描出され、本当に素晴らしい。時代に取り残されがちな初老医の私は、江戸時代の末期、小塚原刑場で死体の腑分けに立ち会い、オランダの医書『ターヘルアナトミア』の正確さに驚嘆した杉田玄白や前野良沢の心境です。MRI画像がこれほど正確に病変を描出できるのであれば、若い先生が「腹部の触診はセレモニーだ」と言うのも無理はありません。

ところが最近、ある若いOLの体験談を聞いて、診察の大切さを改めて認識しました。以下に紹介します。

### CASE

A子さんは20歳のOL。同期に入社したB子さんと一緒に、会社から指定された病院で定期健診を受けました。少し緊張して診察室に呼び入れられたA子さんを担当したのは、白髪まじりの男性医師でした。彼は彼女が診察前に記入しておいた病歴に目を通し、「それではざっと診察します」と言って、眼瞼と口腔内を視ました。次に頸部を触診しました。「リンパ腺の腫れは…なし、甲状腺も……いいですね」と言って、今度は胸を聴診しました。「心臓の音は……よし！肺の音は……きれいですね。よし！これで終わりですよ」。A子さんはほっとして診察室を出ました。

待合室に行くと、先に診察を終えたB子さんが浮かない顔で座っていました。何か異常でも見つかったのかと思い、わけを聞くと、彼女は「今日診てくれた先生は一度も私の体に触ってくれなかったわ」と言いました。ちゃんと診てくれたのかしら、と言いたげな表情でした。

B子さんの話を聞いてA子さんは、「私を担当したドクターと随分違う」と思いました。いちいち「よし！」と言うちょっとおもしろい先生でしたが、診察が終わったときには「よく診てもらった」と感じたことを思い出しました。

## 解説

日常の診療でCTやMRI検査が欠かせないものになった昨今、患者の診察は過去の遺物になっていくのだろうかと思案していた私は、20歳の娘さんが、「医師が自分の体に一度も触れなかったので、よく診てくれなかったのではないかと」疑問を抱いた話に驚きました。若い女性は診察で体を触られることを嫌がるのでは、と置いていただけになおさらでした。患者さんにとって診察は、医師が考える以上に大きな意味を持つことを改めて感じました。そういえば私も、心音を聴診した患者さんから思いもかけず「いやー、こんなによく診てもらったことは久しぶりです」と言われることがあります。

レントゲン博士がレントゲン線を発見して1世紀、超音波検査が始まって半世紀、CT・MRI検査が登場して間もなく30年になります。その恩恵を当たり前のように受けて育った若い女性でも、身体を診察してもらわないと診てもらったと感じないというのです。症状が特になくても受ける定期健康診断の受診者でもこのように感じるのですから、症状のある患者さんはなおのことでしょう。苦痛があって、たとえばひどい腹痛で来院した患者さんなら、痛い箇所を触ってよく診てもらいたいと思っていることを知るべきです。患者さんは、丁寧に腹部を触診してもらってはじめて、自分の痛いところをドクターによく診てもらったと感じるのです。腹を触りもせずに超音波検査やCT検査の結果を示すだけで診断名を言われても、たとえそれが正確な診断であっても、患者さんには不全感が残るのでしょう。私たちは、診察の持つ意義を再認識する必要があると思います。

診察による診断の精度は、もちろん画像診断には敵いません。しかし、診察をすることで unnecessary な画像検査を省くことができるというメリットがあります。私が医師になったころは超音波検査がようやく始まったころで、CTやMRI検査なんてまだなく、患者さんをよく診察して病気を推測しました。こうしてつけた診断はそれなりに正しく、丁寧な診察は現在でもまだまだ診断に役立つと思っています。

さらに、診察にできて画像診断にできない大切なことがあります。それは、丁寧な診察が「あなたの苦痛を取ろうと誠心誠意を込めて診ていますよ」という患者さんへのメッセージになるということです。私は、医療の基盤はよい医師患者関係にあると考えていますが、メッセージを受け取った患者さんと医師の間にはよい医師患者関係が急速に築かれるので

## “丁寧な診察”の持つメリット

- 1 unnecessary な画像検査を省ける
- 2 良好な医師患者関係を築くきっかけになる



しょう。診察はセレモニーどころか大きな意義があるのです。今後時代が変われば診療の様子も大きく変わるでしょう。しかし、CTやMRI画像を見せてこれでおしまい、という時代になるのはまだずっと先だと思います。

今回は世間一般の人と、日進月歩する医療の先端で働く私たち医師の間には、「診察」の捉え方に大きなギャップがあるというお話をしました。これをお読みの皆さんは、患者さんが腹痛を訴えて受診してきたら腹を触り、動悸や息切れを訴えたら胸を聴診してあげてください。必ずや短時間により医師患者関係が築かれると思います。

## Profile

星野達夫 (ほしの・たつお)

1968年慶応大学医学部卒業。都立大塚病院内科部長、東京都職員共済組合青山病院健康管理センター長などを歴任し、2008年より現職。